ブレストのアラン・フルニエ

鈴 木 正 昭

〈目　次〉

§1　ブレストへの転校
§2　ブレスト
§3　学　業
§4　海のイメージ
§5　デイヴィー

§1　ブレストへの転校

アンリ・フルニエ（後のアラン・フルニエ）がパリのリセからブレストのリセに転校したのは20世紀最初の年，1901年9月末のことだった．パリのリセ・ヴォルテールで優等生だった彼は，4年生終了で3年を飛びこして2年生への編入を承認された．今日我が国でも導入が検討されているいわゆる飛び級である．

ブレストはブルターニュ半島西端に位置する軍港である．町の起源はローマ時代にまでさかのぼる．英国，ブルターニュ公国の支配を経て16世紀にフランス領となった．今日そうであるような軍港になったのは17世紀のことである．フランス最大の軍港であり，海軍工廠や兵学校が所在している．そのほか大学や海洋研究所など教育研究機関も設置されている．第2次大戦中はドイツの潜水艦基地として利用されたため，連合国軍の攻撃目標となって甚大な被害を被った．そのためアンリの在学した学校も焼失し，彼をはじめ生徒たちの成績等の資料も失われてしまった．

彼のブレストへの転校の目的はもちろん船乗りになるためだった．この志望がどのように芽生えたものであるのかは，彼自身がその詳細を書き残していない以上，推測の域を出ないけれども，彼は翌年になると早くもここを去って別の土地で中等教育を終了させることを希望するようになった，とアラン・リヴィエール氏（親友だったジャック・リヴィエールと妹イザベルの間に生まれた）は述べている[(1)]．この時点で船乗りになる計画は放棄された．以後は教員を目指すべくブルジュのリセ，パリ近郊のラカナール校などで学業を続けることになった．この計画もまた筆記試験には合格したものの，口述試験の失敗により実現することなく終わった．

イザベルは兄の死後2冊のかなり分厚い伝記を書き残した．これにより多くの興味深い事実が後世に伝えられ，アラン・フルニエの文学を語る際はともかく，人となりを知るためには必読の資料になっている．それは『アラ

ン・フルニエのイメージ』(1938年)，および『アラン・フルニエの生涯と情熱』(1963年）である．彼女はそれ以外にも相当数の著作を残した．夫や兄の七光りもあったかもしれないが，一時はフランスの文壇でそれなりの地位を占めた．

彼女は船乗りになってあちらこちらを旅することを夢想する兄の夢想癖，空想癖を父親譲りであるとしている．彼女によれば父親は家族の前でよく次のような様々な計画を打ち明けていたそうである．

「アルジェリアに行けば給料は大幅にアップする．しかも生活費はほとんどかからない．そこに行ったらぶどうやオレンジの木を植えよう．らくだの乳をのみ，子羊の乳からチーズをつくるんだ．しかも原地人の召し使いは望みのままだ．枝からもいだばかりのオレンジにかぶりついて食べるのさ．そしてらくだの背に揺られながらお散歩だ．オアシスに行ってナツメヤシを摘もう．楽しい原始的な生活をするんだ．カビリーの布でできた服を着てむしろの上に寝るんだ.」

これに対し，最初は乗り気でなかった母親も徐々に関心を示したそうである．しかし船酔いと野生動物への恐れから，なかなか決断が出来なかった．そして高齢の祖父母にも一緒に来てもらうか，それとも暑いうちだけ帰省して祖父母のところで過ごすことにしようかというところまで話が進展したこともあったようだ．その家族会議は2日も3日も続くことがあったそうである.そして転勤希望を提出しようというところまで話が進んだこともあった．ところがその時，母親が胃痙攣をおこしてこの計画は挫折した．つまり病気になっても医者にかかることの出来ないような土地は駄目だ，ということになったのである．また別の機会にも，ほとんどまとまりかけた話が母親の極度のヘビ嫌いのためやはり御破算になったこともあった.[(2)]

こうしたやや非現実的な空想癖のある父親と小心で几帳面なタイプの母親という人間類型は，『グラン・モーヌ』では父親と母親というよりもむしろフランツ及びフランソワの母親（ミリー）に割り当てられているように思われる．作中のスーレル先生はさほど空想にとりつかれた人物として設定され

ているわけではない．彼はやや世間知らずなところはあるが，それは作者によれば教師という職業に付随した属性であり，特にスーレル先生を他者と際立たせる特性ではない．それ以外の点では彼はそれほど人の注意を引く人物ではない．それに対し，母親の人物設定はかなり忠実に作者自身の母親をモデルにした造形が施されているようだ．子どもの行状について様々に探りを入れて真相を知ろうとするところなど現実の母親と作品中のミリーとは瓜ふたつである．帰省中の息子宛にきた手紙の差出人について，またそこに書かれていることがらについていろいろ探りを入れるところなど[3]，イヴォンヌの近況をいろいろ尋ねて彼女が妊娠していることを喋らせてしまう場面を彷彿とさせる[4]．

現実の父親の夢想的な性格は作品ではフランツに投影された，と言っていいであろう．そしてイザベルの指摘を待つまでもなく，これは作者であるアンリ（アラン・フルニエ）の特質でもあった．周囲からはいささか理解しがたい，幾度も繰り返された転校にはこうした特徴が際立っているといえる．彼の行動は父親が望みながら実現できなかったことを父親の意向を汲み取り，父親に成り代わって実行に移した，といえないこともない．コピーされた父親の欲望を息子が代行したわけである．

フランツの父親であるド・ガレー氏と母親とがフランツの気まぐれを寛大にも許したように，現実のアンリの両親も息子の気まぐれといえば言えないこともない申し出を，恐らくは葛藤もあったであろうが，結局は許している．作品においてはスーレル家には子どもは1人だけであるのに，ド・ガレー家は両親に息子，娘がそれぞれ1人ずつという家族構成になっていて，職業を別にすれば現実のフルニエ家のそれと同一である．ただし2人の子どもの長幼の別は作品と現実では逆になっている．そして空想癖のある親子という点においてもスーレル先生と息子のフランソワよりも，ド・ガレー氏と息子のフランツのほうがはるかに現実のフルニエ父子に似ている．モーヌやフランツに比べれば，フランソワは想像力に翻弄される度合いは遥かに少ない．もちろんこれは彼の記録者としての役割を考えれば当然のことである．

作品中でも言及されているようにフランツの父親の空想癖と寛大さこそこの物語のそもそもの原因だった.「冬になってはじめての厳寒の日に，彼は静かに息を引き取った．そして私はこの魅力的な老人の枕元に涙を注がずにはいられなかった．彼の寛大な考え方と，息子の空想癖と結びついた彼の空想癖が僕たちの冒険すべての原因だった[(5)]」.

話を元に戻そう．アンリが高等師範学校を目指すべくパリに出たのは1898年の10月である．小学校を卒業したばかりの子どもを1人で遠方の学校に入学させるのは，たとえ寄宿舎に入れるにしても父兄にとってみれば心配なことである．しかもフルニエ家はパリに親類縁者をもたなかった．渡りに船だったのはガブリエル・ビジャールという女性の存在だった．彼女は以前父親の同僚だったのだが，結婚後パリに出て女の子のための小さな学校を経営していた．都合のいいことに彼女は2人いる息子のうち長男のテオデュールの体を鍛えるため田舎で小学校に通わせたいという希望を持っていた．そこで両家の間でそれぞれ子どもを交換して預かることが取り決められた．

こうしてアンリはリセ・ヴォルテールに通うことになった．ガブリエル夫人の住まいはパリの11区にあった．付近には有名なペール・ラシェーズの墓地がある．また当時は刑務所が2つあり，道路を挟んで向かい合っていた．どう見てもあまり居住意欲をそそられる場所とはいえず，むしろ薄気味悪いという印象を持つ人がいても不思議ではない環境である．近くに住む人は町工場の経営者とその従業員が多く，いわば典型的な庶民の町といっていい地域だった．

親元をわずか12歳で離れて1人他人の家に下宿しながら中学校に通う少年にとって，パリは決して親しみやすい町ではなかった．それどころか彼はパリを憎むようにもなった．しかし同時に彼は近所で見かける職人たちには大きな共感を覚えた．そしてこうした共感が生涯変わらなかったことは『グラン・モーヌ』における主人公と職人たちの友好的な関係から明らかである．

彼が通学したリセ・ヴォルテールは入学時点で設立から8年しか経過していない新しい学校だった．彼は親元を離れた寂しさを親に打ち明けることも

なく，勉学に打ち込む生活を送ったようだ．というのも彼の成績は申し分のないもので，大いに将来を嘱望されるものだったからである．現存する最初の手紙が家族宛に出されたのもこの時期のことだった．それは1898年12月13日付である．入院中の妹を見舞ったこと，彼女が元気でいること，月末までに，即ち年内に手術を受ける予定であること，年末の休暇に帰省する前にもう一度見舞う予定であることが冒頭に述べられている[6]．イザベルは股関節炎治療のため幼少にもかかわらず，優れた治療を受けるため親元を離れてパリで入院生活を送っていたのである．彼女のこの病気は『グラン・モーヌ』では語り手たるフランソワ・スーレルに転位されている．彼女の入院は半年の長きに及ぶもので，それも2度にわたっていた．幼子が親元から遠く離れた土地の病院にこれほど長期の入院を余儀なくされたというのは，当時の医学の水準が今日とは比較できないほど低かったことを差し引いても，彼女の股関節炎が相当の重症だったことを物語っていよう．

しかし当然のことながらこの手紙の大半を占めているのは，自らの学校での生活に関する報告である．とりわけいかに学校が楽しいところであるか，またあらゆる教科で良い成績をあげているかが熱心に語られている．そして締めくくりとしてビジャール夫人がとてもよくしてくれることが報告される．事実この3年間のアンリの成績は実際申し分のないものだったようである．彼は当時から既に苦手意識を持つようになっていた歴史以外の教科では主席を占めるほどの優等生ぶりを示した．彼のライヴァルといえそうな生徒は2人いたけれども，彼らとてほとんどすべての教科で主席を占めることは出来なかった．ところでこの時代に同級生たちとともに写された写真が保存されているのであるが，ジャン・ロワーズの調査によりそのうちの3名が若くして病死し，4名が第1次世界大戦で戦死したことが明らかにされている[7]．そしてアンリ自身を付け加えれば戦死者は5名となって，4分の1を越えてしまう．第1次大戦がいかに大きな戦争であったかを示す事実と言えよう．実際フランス各地を旅行していると，第2次大戦の戦没者慰霊碑よりも第1次大戦のそれを見かけることが多いように思われる．

彼はリセ・ヴォルテールにはこの後もさらに2年近く在学することになるのであるが，今日残された彼の書簡はこの1通だけである．

順調なスタートを切った彼のパリ遊学であったが，1900年に大きな変化が生じた．というのはガブリエル・ビジャール夫人が所有する施設を譲渡し，パリ郊外に別の学校を設立することになったからである．譲渡を受けたのはポーリーヌ夫人という女性だった．ロワーズによれば彼女は従来のややもすれば無秩序に傾きがちだった雰囲気を「静かな厳格さ」[8]によって統一しようと試みた．そのため校内の雰囲気は重苦しいものになった．所有者が変わってもアンリはそのまま同じ場所に住み続けたのであるが，彼にとってもこの変化は決して歓迎すべきものではなかったようである．彼はこの頃から学校からまっすぐに帰宅することが少なくなっていった．彼は友人のジャン・ベルナールらとあちらこちらを歩き回り，首都の多様性に触れていった．あてどもなく彷徨するモーヌの姿は当時のアンリ自身を彷彿とさせる．

彼の好奇心をパリからさらにかなたの世界へと誘う催しが，この19世紀最後の年にパリを舞台に半年間にわたって開催された．それは19世紀最後の万国博覧会である．19世紀はよく言われるように，万国博の世紀と言ってもいいほど世界各地で万国博が開催された．とりわけパリが万博の招致に熱心だったことはひろく知られている．

彼がこの万博をどの程度見物したのか，その詳細は明らかではないが，彼の想像力がそれにより大きな刺激を受け，空想はますます膨らんでいったことは間違いがないものと思われる．ロワーズは「僕はあちらこちら旅行するため船乗りになるんだ」という当時アンリが語ったとされる言葉を引用している[9]．もちろんこれだけがきっかけではないであろうが，結局彼はパリの学校を去って，ブレストへと赴くことになった．

イザベルはこの転校の原因は主として下宿での孤独感によるという趣旨を語っている．ビジャール夫人やポーリーヌ夫人がアンリの世話を十分にしてくれなかったからであると言わんばかりの主張もなされているけれども，よその飯を食うということは元来そうしたもので，もしフルニエ家の人々の期

待する通りの待遇が与えられなかったからといって，これら2人の夫人の側に大きな非があったということには必ずしもならないのではないだろうか．とりわけポーリーヌ夫人に対してはかなり手厳しい言葉が投げつけられている．これには石膏の作り替えのためパリ滞在が長引いたイザベルがポーリーヌ夫人のもとに預けられ，そこでつらい思いを味わったことが影を落としているように思われる．彼女は今日風に言うならばやや年長の女の子たちのいじめにあったのだった．そして彼女にはアンリも彼女たちからいじめられているように見えたのだった[10]．

経営者の交代による下宿生活の変化，世界各地の風物から受けた刺激による海外への憧憬，孤独感などの複合により転校を決意するに至った，というあたりが無理のない解釈ではないかと思われる．

§2　ブレスト

アンリがブレストに着いたのは1901年9月30日のことだった．偶然今度の学校もヴォルテールの名を冠していた．ここではパリ時代と異なり寄宿舎生活を送ることになった．大きな期待を抱いてきたブレストではあったが，彼は直ちに大きな失意を味わうことになった．

パリ時代には家族宛の書簡が1通しか残されていないけれども，ブレスト時代には1901年9月30日付のものから始まって，翌1902年の5月4日付のものまで実に12通も残されている．「ブレストは古びていて陰うつな町です．そしてリセは兵舎のように見える巨大な建物です[11]」という到着直後に書かれた言葉からは，この町での暮らしが予期に反した暗いものになるかもしれないという悪い予感におびえている様子がうかがえないであろうか．

パリ時代優秀な成績で5学年と4学年を終了したアンリはブレストでは3学年を「飛び級」して2学年への編入を許可された．フランスに限らず欧米諸国では，近代の教育制度が確立した当初から今日我が国で導入が主張されている制度を伴っていたのは興味深い．平等志向の強い我が国に比してフラ

ンスでは（他の欧米諸国もだいたい同じであるが）能力，資質の違いを当然の前提としてシステムが構築されているからである．

ブレストでの生活は軍隊のそれを思い起こさせるほど時間の制約が厳しい，過酷なものだった．太鼓の合図による起床が5時半，寄宿舎出発が6時，以下夜8時の就寝に至るまで極度に余暇を圧縮した時間割が採用されていた．アンリは最初の2日間の体験で「すべての物が監獄と兵営を模倣して作られている」生活に「とても悲しい」思い[12]をした．また室内の備品もパリ時代のそれより古くて，擦り減っていた．

同級生は32名でそのうち19名が寄宿生だった．朝6時と夕方7時にはお祈りをあげた．食前にも祈りをささげる習わしだった．

この寄宿舎では家庭からの書簡以外は制約を受けた．パリ時代の友人ベルナールの手紙が転送された際も，彼はなかなかそれを受け取ることが出来なかった．もちろんその手紙は大したことが書かれていたわけではなく，アンリの転校を学監が残念がっていた，という内容に過ぎなかった．この経験からアンリは，以後自分宛の手紙は両親からの自分宛の手紙に同封するよう依頼した[13]．こうした規則づくめの生活がアンリをブレストから遠ざけ，最初の計画通り教員への道へと向かわせた要因の1つだったかもしれない．しかし書簡には以後，あまり学校生活に関する不平不満が述べられることはなかった．今日我が国でもいじめをはじめとする問題が親や教師に打ち明けられることなく重大な結末を迎えることが問題視されているけれども，いつの時代でも子どもは自らの心配や気がかりを友人に語ることはあっても親にはあまり語らないようだ．

書簡の内容は多岐にわたるとはいえ，学生であるから学業，とりわけ成績に関する話が多くの部分を占めている．クラスには数名の留年生がいたことから，成績評価が我が国のそれに比して相当厳しいものであったことが想像される．筆者は中学，高校を通して同級生が落第した例を1つも目撃していない．大学でも自らの事情で中退した者はあっても，卒業を希望しながら叶えられなかった例は1つもなかったように記憶する．約半数しか卒業できな

いといわれるフランスの大学と比べると，どちらがよいかの判断はともかく，彼我の違いの大きさにはやはり驚かざるを得ない．現在教育改革の叫び声は大きいけれども，こうした問題にどのように対処すべきか，我が国では未だコンセンサスは得られていない．

当時フランスのリセには郷里から離れて寮生活をしている学生のためのコレスポンダンという制度が存在した．これは一種の身元保証人で，学生が外出する際に家に招き，家庭の雰囲気を味わうことができるようにして精神的に不安定に陥らないことを確保するための仕組みだったようだ．生徒の父兄がそれを承認した時点で確定した．アンリのコレスポンダンを引き受けたのはエルゴエ夫人という女性だった．両親宛の書簡には承認するむねの手紙を送って欲しい，あるいはそれがまだ届かないので外出できなかった[14]，という言葉が見出される．

ブレストのリセでは時々所持品検査も行われた．彼は数名のクラスメートとともに櫛が不潔だという注意を受けたことがあった．そして「君のように将来もっとも優秀な生徒の1人となる者がこのような下らないことで注意を受けないように[15]」と諭されている．

ところで今日から見て過剰とも思える寮生活に課せられた様々な制約も，男子に対してと女子に対してとでは大きく異なっていた．1903年10月22日付のアンリ宛書簡において，イザベルは女学校の寄宿舎生活の不自由さを兄に訴えている[16]．

この書簡はまず返信が遅れたことに対する釈明から始まる．男子校の場合と同様，女子校でも寄宿生は両親からの書簡以外を受け取ることは出来なかった．以後自分宛の書簡はひとまず両親の元に送り，両親から寄宿舎に送って欲しいという依頼である．これはアンリの場合と同様の対処法である．

ごく最近に至るまで，女性に対しては万事にわたり多くの制約が課せられていた事情を考慮すれば，この程度は驚くにはあたらないであろう．女子校では休日の外出は第1と第3の日曜日に限られ，しかも朝の8時から夜の8時まで，しかもコレスポンダンが不在の場合には外出は不可能だった．自習室

での学習は，アンリの場合には生徒だけの学習だったのに，イザベルのところではお目付け役の女子職員の監視下でのみ許可された．

私語はもちろん厳禁で，減点の対象になった．自室での学習はアンリの場合は時間にかかわりなく可能であったが，彼女の学校では決められた時刻以後消灯しないでいると処罰の対象となり，賞状の受賞資格と休日の外出を剥奪された．また，通りに面した部屋の場合，外部からの視線を遮断するためよろい戸の開放は禁止されていた．自習室での学習中には忘れ物があっても自室に取りに戻ることは禁止されていた．友人の部屋に行って話すことも不可能だった．自室に花を飾ることも，平日に毛皮を着用することも認められなかった．

ほぼ同時期にそれぞれ寄宿舎生活を送った兄と妹に共通するのは，外出に対して非常に多くの制限が課されていることである．とりわけ女子の場合の制限は修道院ではないかと思われるほどの厳格さだった．また書信の自由が両親以外にはないことは両者に共通した．

§3　学　業

新たな転校先でもアンリは最初のうちは学業に関してずいぶん楽観的だった．ラテン語とフランス語は大丈夫．数学に関しても10点満点で4点の成績をとっても彼は強気だった[17]．英語に関しては船乗りを目指す生徒が多くを占めるこの学校の生徒の水準はかなり高く，元来この科目を得意科目にしていたアンリも手強いライヴァルの存在を意識して強い緊張感を強いられたほどだった[18]．とりわけヴォキャビュラリーにおいて相当の差があった[19]．その他の科目に関しても当初彼は自信に満ち溢れていた．

しかしいくつかの科目に関しては，徐々に自らの弱点を自覚せざるを得なくなっていった．授業中の教師の説明がなかなか理解できないこと，しかし教科書を見れば何とか理解できること，したがってそれは教師の説明が速すぎるためであること，それに対処するため次回からは予習しておくことなど

である[20]．物理や化学もまた彼にはやや苦手な科目だった．

そうこうするなかで彼はブレストならではの経験もすることが出来た．それは「レオン・ガンベッタ」という船の進水式に立ち会ったことである[21]．またロシアの海軍士官を目撃し，その制服を含めた容姿の美しさに感嘆した[22]．

また父親の写した写真についての講評も所々に見出される．20世紀最初の年にはカメラの普及率はまだまだ低かったものと思われるが，アンリは後に自動車，飛行機といった新しいテクノロジーにもいち早く関心を示している．後の作品でもこれまた世紀末にはまだ高級品だった自転車が登場して，主人公たちの速やかな場所の移動を可能にした．若者らしく彼はたいていの新しいものに興味を示した．ただし文学，芸術方面での新思潮に対する関心は，後にジャック・リヴィエールとの交際が始まってから急速に高まった．

11月10日付書簡では，彼の所属する航海科2年が省令による変更で古典科2年に変更になったことが報告されている[23]．同じ書簡には数学の試験結果の報告もなされている．それによれば彼は32人中7番である[24]．他の多くの科目が3番以内であることを思うとやはりやや苦手科目であるといえる．寝間着は週に2度，水曜と土曜にベッドの足元に置かれているものを着用する決まりだった[25]．今日でも例えば病院などではこの制度を採用しているところは多い．

アンリから家族宛の書簡には，もっとたびたび手紙を書いて欲しいという言葉が見出される．そしてこれは彼1人に限られたことではなく，多かれ少なかれすべての生徒たちに共通していた．「もし手紙が届いたら君にお菓子をおごるよ[26]」といった言葉が日常茶飯に生徒たちの間を飛び交っていたようである．

1901年末の書簡では，ラテン語作文担当のパスキエという教師から，成績を賞賛されたこと，さらに翌年の11月のバカロレア受験を薦められたことが報告された．そうすれば両親も喜んでくれるし，自分にとってもいいことだと彼も乗り気になった．新年の挨拶を校長に述べるためのクラス代表に選ばれたこと，しかし選ばれなかった者に嫉妬され，嫌味を言われたことな

どもあわせて報告された．最後に歴史と地理の試験で48人中3番になったことが誇らしげに報告された[27]．これらの科目もまた物理や化学とならんでアンリにとってはやや苦手な科目に属していたからである．

ブレストは雨の日が多く，外出もしばしばその影響を被った．元来が軍港であるブレストには客船が寄港することは稀だったが，その稀なケースも緊急避難的な寄港に限られた．26日の大西洋横断の客船の場合もそうで，石炭を積み込むための寄港だった．客船を初めて見た彼は1，2等船室と3等船室のあまりの格差に大きな驚きを示した[28]．

この年のクリスマス休暇にはアンリは帰郷しなかった．そして彼同様に帰省しなかった生徒が十数名いた．ブレスト滞在中には12通の家族宛の書簡が書かれたけれども，その大部分の10通が最初の3ヶ月に集中している．彼がいつブレストを去り，他の土地で中等教育を終了しようと決めたのか，日時の確定は困難であるが，彼は転校後それほど経過しないうちに再度の転校を決意したのではないかと思われる．

いずれにせよ彼は異郷の地で1901年を送り，新たな年1902年を迎えることになったのである．1901年に15歳だったアンリは，後に『グラン・モーヌ』において，この15歳という年齢に青春期の過ちという意味を付与している．「彼は今でも相変わらず15歳なのだ！　サント・アガトにいた頃僕たちはその年齢だった．その年齢の時僕たちは3人ともあの子どもっぽい誓いを結んだのだった[29]」．彼は己のブレスト転校を「子どもっぽい」選択だったという苦い悔恨の思いで振り返りながら，この一節を書いたのであろうか．

1902年にはわずか2通の書簡しか残されていない．2月1日付と5月4日付である．前者には学業に関する記述が大半を占めている．試験に関してと，バカロレアの準備に関して学校側からはギリシャ語と文学の個人教授を受けさせるよう父兄宛に手紙が書かれ，それに関するやり取りが中心である[30]．ラテン語の試験で2番であったこと，そして1番はポニーというクラスメートだったことが記されている．このポニーこそは，後にアンリの死後出版された『ミラクル』中の『肖像』という短編の主人公とされる人物である．

5月4日付の書簡はブレスト時代最後のそれである．彼は以後も年末まではブレストに在籍したのであるが，夏休み以降の書簡は残されていない．この最後の書簡も最初は試験についての報告である．次いである式典で教員の奥さんたちに腕を貸して礼拝堂に案内する役を仰せつかったことについての報告が，かなりの部分を占めている．この折りの写真が販売されているけれど，多くの生徒と一緒に写したものであること，しかしあまりにも多くの学生が写っているし，自分の親しくしている者で写っていない者がいるので今回は購入を見送ったこと，来年は買うつもりであることなどを述べている[31]．この時点では彼の再度の転校はまだ確定的ではなかったのであろうか．それとも自らは既に決心していたけれども両親にその意向を打ち明けるのは時機尚早であるとして，好機を待っていたのであろうか．

この手紙には自分がブレストで覚えたいくつかの曲の楽譜を送る予定であることも記されている．これは自分のことを思い出してもらうためであり，同時に夏休みに教えてもらいたいからであるという理由が添えられている．そしてイザベルの『イマージュ』によれば，夏休みに帰省先のエピヌイユの賞状授与式でブレストの学校の制服姿でこれらの歌を披露したのだった[32]．

いずれにせよ，ブレストからの書簡には正直な気持ちが打ち明けられたことはほとんどなかった．転校したいという希望を両親に打ち明けた時点では様々なことが語られたであろうが，今日まで資料として残されたものには当時の心情を打ち明けたと思われるものはあまり多くはない．家族宛の書簡には一見楽観的なことばかりが述べられているものの，船乗りになるため転校したにもかかわらず，ブレストからの書簡には将来の職業についての抱負はまったくといっていいほど語られていない．この沈黙こそ彼の幻滅を裏面から雄弁に裏付けているのかもしれない．

当時の彼の心情を告白したと思われる数少ない資料の1つとしては，1910年の12月に当時愛人関係にあったとされるジャンヌ・ブリュノーという女性に宛てた書簡がある．彼女は，研究者たちから『グラン・モーヌ』のヴァランチーヌのモデルに擬せられている女性である．この書簡はイザベルの

『アラン・フルニエの生涯と情熱』に全文が引用されている．

「ブレストのリセに滞在した頃がよみがえった．当時は木曜の夕方散歩に出かけることもなく，閉じ込められた悲しげな子どもたちは「ヴェルノの暦」を読むために議論していた．オレンジを食べている者もいた．僕はポケットに両手を突っ込んだまま，たった1人で狭い中庭を歩き回っていた．今年は自分にはクリスマスも，元日も薄葉紙にくるまれたオレンジも，野原や氷や雪の上を自由に駆け回ることはないんだと考えていた．(……) この中庭で体を丸め，帽子も被らず，長い髪が風で乱れて目の上に覆い被さるにまかせたまま，僕は自分の思い出をすべて痛切に味わっていた．僕は誰かを愛したかったのだ．知っている女の子たちのだれかれを探し求めた．僕は15歳だった．[33]」

しかしこうした彼の思いが両親に打ち明けられることは決してなかった．1902年には夏休みとクリスマス休暇に帰省した．この間，アンリの両親は彼の生涯に大きな影響を残したエピヌイユからラ・シャペル・ダンジロンに程近いムヌトウー・ラテルへの転勤を命じられた．ここはロワーズによれば村というよりもむしろ部落といったほうがいいほどの小さな村だった．[34] 両親がここに勤めたのはわずか1年である．1903年の新学期からは両親揃ってラ・シャペル・ダンジロンに転勤することになった．

彼がブレストに戻った時には両親は既に新たな任地ムヌトウー・ラテルへの移動を完了していた．彼は引越しに立ち会う前にブレストに戻っていたからである．クリスマス休暇に帰省したムヌトウー・ラテルでどのような話し合いが親子の間で持たれたか，その詳細は今日になっては不明であるが，結果的には今回もまた両親は寛大にも息子の希望を叶えたのだった．

彼は1903年の1月からはブルジュのリセに通うことになった．アンリはこのリセにはわずか数ヶ月しか通学しなかったのであるが，リセは彼の在学を記念するため1937年に校名をリセ・アラン・フルニエに改めた．在学期間があまりにも短かったため，彼は頭角をあらわすチャンスもなく，教師や級

友たちにもそれほど強い印象を残すことは出来なかった．その点パリやブレスト時代とは異なっていた．同年の10月の新学期から彼はエコル・ノルマルを目指すためパリ近郊のリセ・ラカナールに移り，ここでさらに3年を過ごすことになった．ここで生涯の友となったジャック・リヴィエールと出会ったことはあまりにも有名である．

§4　海のイメージ

『グラン・モーヌ』に海のイメージが多用されていることは一読すれば明らかである．彼自身はフランスの中心部で生まれ育ち，ブレストのリセに移籍するまでは海を見たことはなかったはずである．彼の海への憧れを育んだのは幼年期から多読した冒険物語のたぐいであろう．また海兵隊員だった父方の叔父の語る海外での経験談など，それに父親譲りの夢想的な性格が合わさって形成されたものと思われる．この叔父のことは『グラン・モーヌ』にも，装飾を施した短刀やスーダンの革袋などを持ち帰ったモーヌの叔父として紹介されている[35]．彼は結局のところ船乗りになることはなかったけれども，後の作品に見られるごとく船乗りに憧れた少年の心は生涯変わることはなかった．

物語の発端，フランソワは現在は住んでいないかつての住まいを「岩から引き，また岩に打ち寄せて砕ける波のように，私たちの夢が出て行き，戻ってきて砕け散る[36]」場所であると想起している．かつての住まいは同時に学校でもあり役所でもあった．フランスの農村部では学校と役所を兼ねた公共施設が以前はよく見受けられた．

この学校はフランソワにとっては「大洋に浮かぶ船[37]」であると意識されていた．周囲の田園地帯が海であり，そこここにある建築物が海に浮かぶ船舶に喩えられるのは無理のない極めて自然な連想である．実際フランスに限らずヨーロッパを旅した人間が都市を出ると，直ちに田園地帯が始まりそれがどこまでも続く光景を目撃して，都市自体が緑の大海に浮かぶ船あるいは島

のようだと感じることはしばしばある．航空写真による空からの映像もやはり同じ印象を見る人に与えずにはいない．だから夜遅くなってから帰ってきたモーヌの馬車は「沖からもたらされた漂着物[38]」なのである．

寝床を抜け出して外出の支度をして屋根裏部屋を徘徊するモーヌの姿を見て，フランソワは航海から戻ったブルターニュの水夫が船上の習慣を忘れることができず船内を見回ったように家の周囲を見て回るという話を思い出している[39]．またモーヌはモーヌで「不思議な祭典」で日焼けした会食者たちを見て，彼らが船乗りであること，ただし村の外に出ることなく，困難なしかし危険の伴うことのない航海を続けてきた人々であることを見て取った[40]．海に喩えられる広大な田園地帯で働く農夫たちは，海で魚を捕ったり交易に従事する船乗りに喩えられているのである．

この祭典の主人公の1人であるフランツ・ド・ガレは船乗り，あるいはその卵に設定されている．彼はトゥーロンからの帰途ブルジュの公園で見掛けた娘に一目ぼれして，結婚を決意したのだった[41]．

トゥーロンは地中海に面した港町で，ブレストと並ぶ軍港の所在地である．もちろん現在では軍事的な重要性の他に，ワインやオリーブなどを原料とした食料品工業の盛んな土地であり，同時にこれらの輸出港でもあり，石油，木材などの輸入港でもある．また気候温暖なため現在では避暑地としても名高い．第2次大戦中この港に停泊していたフランス海軍の主力部隊がナチス・ドイツの手に落ちようとした時，それを防ぐためこれら戦艦がすべてフランス軍の手により沈められたことは記憶に新しい．

フランツの経歴は他の2人の主人公，オーギュスタン・モーヌやフランソワ・スーレルの経歴以上に著者アラン・フルニエのそれに近いことは明らかである．船乗りになるためそれぞれブレスト，トゥーロンといった土地に赴いたこと，妹，姉という違いがあるけれどもそれぞれ姉妹が存在していること，夢想的な性格でしかも子どもの空想に対しても極めて寛大な子ども同様に空想癖のある父親がいること，そればかりでなく場所はそれぞれパリとブルジュと異なってはいても，そして相手の女性の素性には大きな違いがある

にしても美しい少女に一目ぼれすること，など類似点が非常に豊富である．もちろん，だからといってアンリとフランツは同一であるということではない．彼自身のある側面が3人の主人公にそれぞれ割り振られているのであるが，フランツが一見もっとも多くの共通点を持っていることは否定できないであろう．結婚式当日のヴァランチーヌの逃亡という痛手を負ったフランツは自らを励ますため，港のキャバレーで船乗りの客やホステスが歌う歌を口ずさむことになる[42]．

「不思議な祝典」から戻ったモーヌは，夜間スーレル一家ともども未知の人物に指揮された町の子どもたちの襲撃を受けた．この未知の人物はフランツであることが後に判明するのであるが，彼らの襲撃は海賊に襲われる船への接舷に喩えられている[43]．確かに他の家々から隔たって畑の中に所在する学校を海に浮かぶ船に比べるのは，無理のない自然な比喩であろう．またイヴォンヌの消息をモーヌに伝えるためラ・フェルテ・ダンジロンを訪れたフランソワは，溝に沿って並び，小さな橋を通って出入りする家々が並ぶ様子を目撃して，「帆をたたみ，舫（もや）っている」多くの船を連想したのだった[44]．したがって当然ながら，この作品では愛する2人が味わう幸福は「漂流する船の2人の旅客[45]」のそれに類したものとなるわけである．

だからこそモーヌがパリに去った後，ドウルーシュの家で他の仲間たちとの間に齟齬をきたした時，フランソワは「人間と話していると信じていたのに，突然それがサルであることに気づいた[46]」漂着者のように失望しなければならなかった．

§5　デイヴィー

上に見たように『グラン・モーヌ』には海に関わるイメージがしばしば見出される．これらがすべて彼のブレスト体験から産まれたものではないであろうが，また無関係とする根拠もないであろう．海や海の向こうの国々に対する彼の思いがパリのリセを中途で止めてブレストに転校するという突飛な

行為になにがしかの関係があったことは間違いがない，と思われるからである．

ところで彼の著作中には彼のブレスト体験がなければ決して産まれることのなかった作品が存在している．アラン・フルニエがその短い生涯に残した作品は決して多くはない．長編としては本稿で扱った作品がすべてである．それ以外には次の長編になるはずだった『コロンブ・ブランシェ』の草稿と死後まとめられた『ミラクル』，および記者時代に書かれた雑誌記事くらいである．しかし作品の少なさに比して書簡の多さは目を見張るほどである．あまりにも有名なジャック・リヴィエールとの往復書簡集や家族宛の書簡以外にも彼はシャルル・ペギーをはじめ，プチBという綽名(あだな)をもつルネ・ビシェや最後の愛人だったマダム・シモーヌとのそれらに至るまで驚くほど多くの書簡を残している．

上記の作品中『ミラクル』は『グラン・モーヌ』以前に彼が様々な雑誌に執筆した短編小説，エッセイ，及び最も初期の作品といってもいいロンドン滞在中（1905年）に書かれた散文詩までを含む作品集である．この作品中の最後に近い場所に置かれた『ポルトレ（肖像）』と呼ばれる作品こそ，彼のブレスト体験がなければ産まれることのなかった作品である．初出は1911年9月のN. R. F. 誌である．初期の詩編から数年を経，彼の創作力も大きな進展を見せていた時期の作品であるだけにもはや習作の拙劣さはなく，独立した作品としての鑑賞に堪える『ミラクル』中屈指の好短編である．要旨を簡単にまとめれば以下のようになる．

その頃私はB市に所在するリセで海軍兵学校の受験に備えていた．私は15歳だった．同級生にデイヴィーという少年がいた．彼は漁師か船乗りの息子らしかった．散歩に出かける時に彼が着用する短マントは我々のそれと変わりなかったが，彼のマントからはかじかんで，むくんだ大きな手がはみ出していた．

彼は目立たない少年だった．うなだれて子どものような体つきからは彼の

恐るべき力強さを想像することは不可能だった．彼はまた醜かった．顔は寸詰まりで，唇は魚のそれのように突き出していた．

私は長い間彼と口をきく機会はなかった．彼の交際している10人ほどの仲間は，およそ私が付き合いたいと思う少年たちではなかった．彼らは見習い水夫の出身で，粗野で無口で，こっそりたばこを吸うことばかり考えているような連中だった．彼らはお互いを名前で呼ばず，綽名で呼んでいた．デイヴィーの綽名は「猫皮」だった．私がはじめて「ねえ，デイヴィー君」と話しかけた時，彼はどんよりと曇った目で私を見，「俺はデイヴィーじゃないよ，『猫皮』さ」と答えた．

そんなことがあったので，私は以後彼に話しかけることはしなかった．彼は依然として私の好まない生徒とばかり付き合っていた．それに彼は自分の惨めさを楽しんでいるようにも見受けられた．私は彼がもっと不幸せになればいいのにとさえ思っていた．そして私にパリや芝居について問いかけてくる程度のいい生徒ばかりと付き合った．

5月頃のことだったが，フランス語だったかラテン語だったかの作文の試験で彼と私とが1番になったことがあった．それが私たちを近づけた．彼は時々自分の書いた文章を私のと比べにやってくるようになった．そうこうするうちに彼もまた他の者同様海軍の士官志望であることが判明した．だが彼はそれを実現不能な志望であると考えていた．彼は自分を徹底的に軽蔑していて私が彼を誉めると頭を振り，鼻を鳴らした．しかし彼には素直な面もあることに私は気づいていた．彼も愛嬌を振り撒いたりおどけたりすることがあった．

今になって彼との会話を思い起こそうとすると，彼とは試験や作文についての話しかしなかったことに気づく．しかし1901年の夏に経験した2，3の思い出を述べて私の不安と悔恨との理由を明らかにしたいと思う．

私たちは朝方校庭に出て自習に戻る前にいくらかの自由時間を与えられていた．校庭といってもそれは四方を壁でふさがれていた．その時刻にはまだ日の光はあたっていなかった．目を上げると電信のケーブルが朝日に照らさ

れて金色に輝き，それに止まる多くの小鳥たちの囀(さえず)りで震えているのが目撃された．誰も大声を上げたり，遊んだりしてはいなかった．ある者たちはこっそりとたばこをすっていた．閉ざされた門の傍らに群れている者もいた．

こうしたある朝のこと，私はあるアンソロジーのなかに『ドミニク』の一節を見つけた．それは青年期の私の心に打ち込まれた細く，長い針のように私の心に深い印象を与えた読書体験だった．私はその感動を1人だけで噛み締めていることが出来ず，たまたまそこに居合わせたデイヴィーにその一節を読むよう求めた．しかし読み終えた彼の反応は私の予期したものとは異なっていた．彼が示したのはいわく言い難く，耐え難い気詰まりだった．

またこんなこともあった．フランス語の授業終了後に私たちは朗読の練習をしていた．デイヴィーたちのグループはこれを軽蔑していたのだが，ある時何を考えたのか，デイヴィーがこの練習に加わった．だがコルネイユの芝居の朗読は彼には困難だった．不自然な発声法のため途中で息切れがしてしまうのだった．夕方普段の仲間が校庭に集まった時，彼は己の朗読の真似をし，狂ったように笑い，仲間のだれかれとなく突き飛ばしたり，足げりをくらわせたりした．

それからしばらくして，7月の初めころのことアメリカのサーカスが当地にやってきた．休日で町を散策していた私は途中でデイヴィーに出会った．彼も私同様暇を持て余していたので，サーカスのテントが建てられた旧港の広場に行こうと私を誘った．私にも異存はなかった．単なる空き地だった場所がエギゾチックな人々の集う場所に変わっていた．まどろんでいるラクダとそれを起こそうとしている恐ろしく背の高い男が私たちにも聞き取れる英語で指示を与えていた．別のところでは象が材木を押していた．そして腰巻きを巻いた2人の男がわけの分からない言葉で象に命令していた．

そうこうしているうちに私は喉が渇いてきた．それはワインで癒される渇きではなく，若草の上に腰を下ろしたり，小川の水の流れを見つめることによって癒される種類の渇きだった．私が彼もやはり乾いているか尋ねようと

した時，突然強い風が吹いて布で出来た覆いの一部が持ち上がり，なかの様子が目に入った．それはテントとテントの間にある庭のような場所だった．曲馬用の衣装を着た少女が椅子に腰掛けて読書していた．彼女は椅子の上で仰向けの姿勢で本を読んでいたので私たちに気づくことはなかった．私が彼を振り返ると彼は私に微笑みかえした．それから一瞬私をじっと見て，音をたてるなよというように手を挙げた．それから私たちは布の端をそっと下ろして，足音を忍ばせながらその場を立ち去ったのだった．

私がこの土地を去ったのはそれから間もなくのことだった．私は7月14日にもう1度デイヴィーに会っている．この祝日は土地の人々の提灯行列で終わった．帰途私たちは顔見知りの少女と一緒になった．彼女は2人の海軍士官に呼び止められたことを自慢げに語った．それを聞いたデイヴィーは「俺は士官になっても君の尻の後は追わないよ」と言い，私の同意を求めた．

それから10年，私は彼の消息を知ることなく過ごした．その間2度彼からは絵葉書が届いたけれど，私は返事を書かなかった．そして10年後の今日になって新聞により彼の突然の自殺を知らされたのだった．それは不可解な自殺だった．なぜなら彼は自分にはとうていなれないと思っていた海軍士官になることが出来たからである．そればかりではない．弟も彼をお手本にして彼のようになりたいと思い，父親も彼に相談することなく重要な決断をしないようになるほど彼を頼りにするようになっていた．新聞によれば，好きになった女性の父親から娘との結婚に反対されたことが自殺の直接の引き金だったという．彼は口のなかにピストルを撃ちこんだ．銃弾は頭蓋骨を貫通していた．海軍病院に搬送された時は既に絶望的な状態だったそうである．

私は想像した．彼はきっと街でその女性を見かけ，一目ぼれしてしまったのだ．しかし彼にはどのように振る舞っていいのか皆目見当がつかなかった．自分が側についていれば何か適当な助言を与えられただろうか．彼はその時『ドミニク』のことや私たちがサーカス小屋で見かけた少女のことを思い出していたかもしれない．私に手紙を書いてみようとも思ったかもしれない．しかし，その時彼はそれまでの手紙に私から返事をもらわなかったことを思

い出した．そこで彼は誰にも何も訴えることなく独りで逝ってしまったのではないか…….

もちろんこれは創作であるから，細部にはかなりの変更や装飾が加えられているのは当然である．舞台となった町もブレストとはっきり書かれているわけではなく，Bという名が与えられているだけである．当然のことながら名前もポニーが作品中ではデイヴィーになっている．また伝記的にいえばこれは1902年のことでなければならない．彼は1901年の10月にブレストに転校し，1903年の1月にはブルジュのリセに転校しているからだ．ガルニエ版の全集の編集者は1901年というのは著者の記憶違いであるとしている[47]．もちろんその可能性は極めて大きいけれども，これはドキュメンタリーでも伝記でもないので，それほどこだわる必要のない問題である．さらに7月の革命記念日から間もなく当地を去ったことになっているが，アンリは以後数ヶ月ブルジュのリセに在籍したからである．また立証は不可能であろうが，デイヴィーの自殺が同じくピストル自殺を図ったフランツの造型に影響を及ぼした，と考えてみたい誘惑に駆られるのは確かである．そしてガルニエ版の編集者もその可能性ありとしている[48]．

もちろん現実の事件と小説には相違点もいくつかある．デイヴィーは死んでしまうのに，フランツは一命を取りとめること，自殺の原因がデイヴィーの場合は愛する女性の父親の結婚に対する反対が原因だったのに対し，フランツの場合には女性が結婚式当日に逃げてしまったところが主要な相違点である．しかしいずれも結婚という問題が自殺及び自殺未遂の原因である，という点で両者は共通している．

本編こそブレスト滞在の最大の収穫だったといっても過言ではない．ブレストへの転校は回り道に見えて必ずしもそうではなかった，と言わなければならないだろう．ブレストという迂回路を経由をすることにより，彼は自己の適性を発見したからである．

〔注〕

(1) Alain Rivière　Alain-Fournier　Les chemins d'une vie, p.21.
(2) Isabelle Rivière　Images d'Alain-Fournier, pp.170−171.
(3) Ibid., pp.176−178.
(4) Alain-Fournier　LE GRAND MEAULNES　Nizet, 1983, pp.210−211.
(5) Ibid., p.223.
(6) Alain-Fournier　Lettres à sa famille et à quelques autres　Fayard, 1991, pp. 13−14.
(7) Jean Loize　Alain-Fournier　sa vie et Le Grand Meaulnes Hachette, p.33.
(8) Ibid., p.33.
(9) Ibid., p.33.
(10) Isabelle Rivière　Images d'Alain-Fournier　Fayard, 1989, pp.152−154.
(11) Alain-Fournier　Lettres à sa famille, p.18.
(12) Ibid., p.20.
(13) Ibid., p.22.
(14) Ibid., pp.24−26.
(15) Ibid., p.33.
(16) Ibid., pp.55−57.
(17) Ibid., p.22.
(18) Ibid., p.23.
(19) Ibid., p.27.
(20) Ibid., pp.26−27.
(21) Ibid., pp.29−30.
(22) Ibid., p.30.
(23) Ibid., p.35.
(24) Ibid., p.36.
(25) Ibid., p.36.
(26) Ibid., p.38.
(27) Ibid., pp.41−42.
(28) Ibid., pp.42−43.
(29) Alain-Fournier　Le Grand Meaulnes　Nizet, 1983, p.196.
(30) Lettres à sa famille, p.47.
(31) Ibid., pp.50−51.
(32) Isabelle Rivière　Images d'Alain-Fournier, p.174.
(33) Isabelle Rivière　Vie et passion d'Alain-Fournier, p.142.

(34) Jean Loise　Alain-Fournier, p.40.
(35) Alain-Fournier　Le Grand Meaulnes　Nizet, p.175.
(36) Ibid., p.3.
(37) Ibid., p.18.
(38) Ibid., p.24.
(39) Ibid., pp.34−35.
(40) Ibid., pp.61−62.
(41) Ibid., pp.62−63.
(42) Ibid., p.75.
(43) Ibid., p.90.
(44) Ibid., p.163.
(45) Ibid., p.198.
(46) Ibid., p.137.
(47) Alain-Fournier　Le Grand Meaulnes　Editions Garnier, 1986, p.147.
(48) Ibid., p.151.